

詩南車

昭和七年十一月一日納本
昭和七年十一月五日發行

第二十八輯

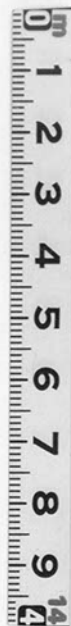


磐城

社

南

詩



詩 南 車 第二十八輯 目次

草の實集(俳句) 渡邊何鳴

短

歌

金風集(短歌)

二十首

詩

宮田青波君夫妻追悼錄

渡邊何鳴 小谷美沙千 片寄歌二 佐藤
政美 美崎一郎 白木英尾 高久 晚霞

佐藤政美
美澤光夫
片寄歌二

唐木登志
吉澤美
他九篇

宮田青波
佐々木顯
山野邊甫
赤井嶽男
美崎一郎
新妻久満夫
白木英尾

大平松夫
山岸彩子
窪田志朗
湯淺照朗
長瀬貞夫
三村哲朗
原斐子

☐ 窓車 ☐ 報録 ☐ 民謡短歌會 ☐ 社規 ☐ 編輯後記

草の實集

渡邊何鳴

新絹に穂草の風のふれもして
夜仕事やそびらに蟲の鳴くまゝに
風わたる木立木立や星月夜
一本の王者の如き鶏頭かな
秋雨や木の實踏まるゝ岩疊
黎明の大地しづかやちゝる蟲
庭先に出て稚拾ふ野分かな
秋の鮎瀬にあらはれて光りけり
小さき箕に草の實たゝき落しけり
雨風の虫ちかちかと鳴きよれる

詩・南車

第二十八輯

三原山

宮田青波

—(2)—

菊丸は夜の粧ひ美しく波泡たて、南に航る(東京出港)
大合歡の葉繁る森に音たて、驟雨しばしば街を過ぎ行く(波浮港)
ロバの脊に胸つゝふしてあへぎのぼる三原の山は火を噴くしきり
またゝくまに曇ると見えし三原山にかづちまじえ粗き雨ふる
雲と煙り交はりて湧く三原火山はるゝ時なく鳴りとどろけり
三原沙漠一里十町のぼりつめて駱駝に錢を一圓さられし
遠雷のとどろく如く底ひびく火山の岩に倚りて酒汲む
妻と居て噴く火を見つゝ酒を汲み死をまつ心安く静けし
しばしばを鳴りとどろかす火山口の見分かぬ底を又のぞき見る
幾尋の底えも知らず煙り湧く火口に足をふみしめて立つ
捨てゝはや惑ふことなき身はかるし三原の山の火口に立てり
三原山は世捨てぬ人の樂しみにのぼるべかりき火はもえさかる

霧笛

佐々木顯

海原の水平線が閉されて霧笛しきりに鳴り渡るなり

たそがれて遺骨や歸るその御母思ひあまりてむせび泣く聞く
山畑に海の遠鳴り聞ゆなり島に逝かれし友を思ほゆ

宮田青波君を悼む

山野邊青甫

解き難き人生なれど若きいのちたちたる君の惜しまるゝかな
くさまくら旅のよき歌かきつづり送るといへばわが待ちのたり
よき歌を待ちぬし時に訃音の配られにけりわれのおどろき
かくのみにありけるものを君の言ただ信じたる悔しかりけり
おぼほしく曇りて悲し君夫妻をはふりし山に曼珠沙華の花(葬りの日)

哀傷編

赤井嶽男

河瀬東朝子、最近愛見美貴君(四つ)を奏ふ、吾れ子を
亡くしたる事無けれど斯もありなんなご想ひて詠める

あるも憂し焼くも得堪へず残されし玩具を前に我れ感ひけり
みまかれる子の思ひ出はさはにあれどかの片言の忘られなくに
何ごごぞ豫約電話のたまゆらに亡き子を憶ひ聲慄はせつ

—(3)—

かりそめの病がなごて永へに吾子を奪ふと知るべかりしや
それよりは小さき男の子の遊べるに顔そむけ行く君となりけり

麥 燒

美 崎 一 郎

初夏の西陽を浴びて麥焼けば額に照らふ炎熱しも
折々は炎のゆらぎ向ひ來て持つに苦しき燃ゆる麥束
揺れ向ふ炎に耐へて麥焼きぬ腕のうぶ毛もいつか燃えつゝ
たらちねの母と麥焼く今日の日の我に嬉しも汗は垂りつゝ
雨近き空もよひなり夕まけて谷々に立つ麥焼く煙
たそがるゝ谷々深く立つ煙一所赤く火のゆらぐ見ゆ
麥殼の燃えてはじくる音きこゆ夜に入りて猶麥焼き止まず
このあたり清水わくらし杉生山小暗き中に足は水漬けり
青蚊帳の青き匂ひにひそみ寝てこの浅宵は人の戀しき
語らはむ友のこほしき夕なりちまたのごよみ蚊帳ぬちにきく
我が植えし日照草の花咲き盛りま夏の庭の畫靜かなり
向日葵は太幹高く靜もりて養鶏場のかたはらに咲く
砂あふる鶏の羽がひの音かそか養鶏場の向日葵の花
藍深き海の光は冷えびえしひそやかにして秋は立ちけむ

丘 根 の 秋

他一束

新 妻 久 満 夫

吾がちかく 啼きたつ雉子に 山の背の みちの歩みを とごめたりけり。
秋浅き丘根の なだれの 薄原の 葉うらさわだち 風吹きわたる。
つまと子を伴ひたちて はればれし。松原の草に 茸をもとむる。
日ののちの 穂なみの明り けざやかに 靜まれりけり。丘根の薄生
渡りくる小鳥捕ふと 小松山 峯の側面かけて 網をはるなり。
刈りしける田づらの上の 明けのそら 群れおくれせず 渡り鳥ゆく。
山萩の花 折りすてて ひそかなる この山みちを ゆきしひとあり。
手折り來て 桔梗の莖の長ければ 本截りつめて 瓶に挿しにけり。
家をめぐる 唐もろこしの葉の ゆすれ かげろひしるく 秋近づけり。
畑に立ち豆を束ぬる 村の娘の うつしき手振り 見て過ぎにけり。
エンヂンの響 かそけく この朝け 豊旗雲ゆ 飛行機きたる。
うち仰ぐ空 はれわたりはるばろし。二國かけて 天の川見ゆ。
一人居の 獸の久しきは守りがたし。虫鳴く夜を 茶をたてて居り。
鳴く虫の籠飼の虫に 夕されば 命保たせむと 草いれにけり。

筑紫の國に住む同窓中原武次に 録二首

足引の山川の 音のたえわかれ はろけきひとゝ 君はなりにけり。
みちのくと筑紫に わかれ住みつて 年經しとおもふ。ことのむなしさ。

十月の手紙

白 木 英 尾

働かないで生きてゆくこのさびしき、人の言葉を考へてゐる
せうせうと吹いてくる秋の風、ぼつねんと自分の姿をかへりみる
蕭々と秋風の吹く中で、ぼろぼろになつた感情をつくるふてゐる
山がある、雲と光りがある、こんこん湧きたつ青天がある、秋！
庭にしろじろと萩の花がこぼれてゐた、今宵は十月の手紙を書こう
夜更けて本を讀んでゐると、夜風が戸をゆすりさみしくてならぬ
字を書いても茶をすゝつても、りりりりと虫が鳴いてゐる

この人と話してゐると、ずうずうとくる哀愁がたまらなく、いゝのだ
トリトマスの花が咲いて、ふとかなしい思ひ出がある、雨ぐもり
かなしい思ひ出がしとしとともえあがる、トリトマスの赤い花から
かつてのおまへの純情をいとしみ乍ら滂々と熱くあふれくるもの
は、てしもなく漂流するおまへは、ただ一片の木片でしかない
いつさいを否定しようとする、今はあゝおまへのことも否定する
わざとそつけなく返事したものゝ、もう一人の自分は泣いてゐた
白つぼけて夜明けの月がある、わたしよ、火の點らない家へかへろう

餓死せんとする 貧農に歌ふ

唐 木 登 志

いのだ

×

俺は黙つてゐる事が出来なくなつた
日本中の百姓の仲間達が
米を作つて居ながら食ふ米に窮し
ヒエを食ひ
草の根を掘り木の實を食つて
只天をにらんで死を待つてゐると云
ふ事實の前にあつて

×
俺は日中の政治をとつてゐる偉い人
達をうらむ

農村が斯んな状態になるまで知らな
かつた事ではなかつたらうよ
それを知らなかつた奴等であつたも
知つてゐても知らぬ顔をしてゐた奴
等であつたなら
ソイツ等に政治をこらせる必要はな

俺は全國的に捲き起された

農村救済請願運動に反對する

農村を救つて呉れど政府へタンガン

したのは

飢餓線上をさまよつてゐる幾萬かの

貧農達ではなく

小作人達から搾れるだけしばつて了

つた地主様達だ

その地主様が何萬邊請願とところで

何で貧農の生活が幸福になれようか

タンガン運動で

餓死せんとする俺達仲間が米の飯さ

へ食へる様になれるなら

俺達はどうの昔にそいつをやつて幸

福になれただらうに

×

俺は又モラトリアムにも反對する

明日の命を氣付ふ仲間達に

車窓

美 澤 光 夫

文學大衆化の問題は大分以前から
種々な説が既成文壇に於て提唱さ
れ、互に混同の限りをつくして
來たが未だに何等の成果を期し得
なかつた。彼等の大部分はこの提
唱をなすに當つて何故吾々の文學
が大衆化し得なかつたかに就いて
考察したのであらうか？ 若しそ
れをしたとすれば吾々は次の事實
に着眼しなかつた彼等の不備なる
点を指摘せねばならぬ。
先づ大衆とは如何なる存在か、人
口の六割を占める農民と二割五を
占める労働者これ等の階級の人々
を除外して大衆はどこにある。従
つてこれ等の人々の文學を提唱せ
ずして文學の大衆化は有り得るで
あらうか。
彼等は、この事實を知る事が出来な

減るものは食物ばかりで殖えるものは借金ばかりだ
それに何年かの借金支拂停止を實行したところで
貧農の生活はさうなるまいふのだ！

×
俺は海一つ越えて飢餓のない國ソヴエトロシアの歴史を知つてゐる
かつては俺達仲間様と飢餓にせめられ
限らない支配階級の壓迫と搾取に苦しめられてゐたロシアの貧農達が
自からの幸福のために
その政權を奪つてソヴエトを樹立
した事を
そして現在搾取なく飢餓もなく
子供も女も老人も
自由の中で幸福に働いて暮らしてゐる事を……

俺達がニュースや寫眞でみる
自由の中で幸福に働いて暮らしてゐる事を……

ソヴエトの勞働者農民の朗かな顔
あの顔は壓迫の鎖を絶ち切つた勝利の顔だ！
自由の顔だ！

×
九月の太陽「稲きん／＼」發育させる
間もなく訪れる收穫の秋
仲間達は又一ケ年の忍苦の結晶を地主のために奪はれて行くのだ
お、
飢餓線上にうめく貧農大衆よ
一切のブルジョア政策を偽善を葬れ！
俺達の要求は資本家地主へ！

明るい太陽

吉澤 健

緑が
野原へフレッシュな感覺を與へること
俺達の大好きな五月が来るんだ

白いシャツ一枚になり

にじみ出る汗を

緑色を含んだ大氣の愛撫にまかせて

俺は土塊をたゞきこはしてゐる

野原を横切る眞白な道を

荷を満載したトラツリは

芋蟲の様に馬鹿氣で走る。

激測たる勞働力を持たない

ブルヂョアの娘は

軟弱な肩にバラソルを廻はさうと

俺達には何のかゝはりもないことだ

唯……

巨大なロボットを聯想させる

送電塔は鐵

その兩腕に引下げた白い碑石を

五月の太陽にさんさんと反撥し乍ら

野原の俺達へ。

新鮮な「時代の力」を暗示してゐる

……振上げた萬能の下に

白ちやかけた土塊は碎ける

その心地よさ

薫風にそよぐ若葉の緑色は

健康と平和と

そして俺達の心のシンボルである

野 菊

澤 美 枝

油污たない皮膚、ぼう／＼と頭髪

高い頬骨

ぐす黒い眼付の男

陰惨な監獄の御厄介者……と

思て私は彼を見た

瞬間

不細工なあかだらけな男の手が

路傍の野菊の花に觸れた

につこりと笑つた細い眼をして

鼻にもつていつた

私は遠去かつてゆく姿を見送ながら

崇高な彼の魂にうなだれた。

(8)

かつたのであらうか、彼等はこの事實を知つてゐた。だがこの事實を實行するに當つては先づ大衆の意識を準備に立つて大衆の要求する文學を製作せねばならぬ。さすれば彼等が希求してゐる所の自慰的文學は望み得なくなる。この事は彼等の最大の任務である社會的文學啓蒙云ふ役割を放棄する事になり従つて存在價值を失ふ事である。この事はプロシヤが要望してゐる被壓迫階級の首從化を完全に一致してゐるのである。斯かる時全プロレタリア階級の指命を負ふて結成された日本プロレタリア文化聯盟(コップ)は實に重大な役割を持つてゐるのである。

吉 田 甫

拾月の十六日から約十日間程、すでに編輯済みになつてゐた原稿を仕舞込んだ儘上京してつたので發行が遅れて何とも申譯もない。車窓の一隅をおかりしておわびする。なべてぼん／＼と霞んだ月が出る迄は僕の詩性は餘りに疲れて眠るだらう。

僕には最早詩も歌もない
△詩なんかなんだ
パンも食へずに餓死した勞働者がある

日本の十月

ぼん／＼と唯ぼん／＼と世の冷たい皮相を歩み續けてゐる。

片 寄 歌 二

私は余りに言葉を知らな過ぎる
尤も或る程度迄の美辭麗句は何か
に依つて補筆するといふ方法は知
つてゐる。けれど私の言ふのは感
情を率直に描出する嚴正な意味に
於ける所謂ナチュラリスティックな
言葉の事で、つまり突然的な事件
に遭遇した時、その心感動を現
はす言葉は何んな人間でも至極平
凡な言葉で盡きて了ふだらうと思
ふ。それが事實かも知れぬ、まじ
てそれを紙上に表示するには一方
ならぬ苦痛が伴ふだらう、私は今
度の宮田兄弟の死に遭遇してつ
く／＼痛感してゐるもの、一人で
ある。

(9)

くごふち

大平松夫

雑報

朝日影山にてりつづ、ふじの葉面に露の流れ居る見ゆ
とく去りし毒消賣りの連れらしが夏深草に見えかくれする
かそかなる待宵草の花の色夕かたまけて見ればさみしき
白雨晴れの峡間あかるし啼く蟬のひとつの聲の遠く聞ゆる
麓村見下す峠道の景色よし巖根に立ちてカメラ向けたり
裸形なるまきに踊れる女等のさわぎに吾れもゆきて見にける(温泉にて)
朗らかに踊る裸女のおもしろや唄に合せてうつつなきかも

砂に憩ひて

山岸彩子

唯獨り砂に憩ひてきゝ入りぬ晴れたる空にひゞく波の音
雑草の砂丘のぼればはまなすの花咲きむれて静けさあたり
砂に残る足跡淡く消え去りて鹽屋岬に陽はかたづけり
濃みどりの水の面をかすめつゝ水無月の沼につばめ飛び交ふ
しみゝと冷えを肌へに感じつゝさ霧流れる夏のあけぼの

同人宮田青波君は九月二日喜代子
夫人と相共に大島波浮の港にて卒
去す、誠に哀悼の意に堪えない。
葬儀は同二十七日神谷村一山寺に
行はれたが詩南社より花輪一箇及
び香料五圓を供へ佐々木、片寄、
山野邊、吉田、美澤、山下、湯淺
三村、白木等代表會葬し左の弔詞
を呈す。

弔詞

噫宮田青波君忽焉トシテ逝ク。
而モ令聞喜代子夫人サ伴ヒテ自
ラ死出ノ旅ニ立ッ
去ル四日、大島ヨリノ君ガ最後
ノタヨリヲ受ケタ時、私ハ再三
再四ソノ文面ヲ讀ミ返シテモ君
ガ書イタル事實ヲ信ジ得ナカッ
タ。然ルニ噫今コ、ニ君タチ二
人ノ妾ナキ妾ヲ見ヨウトハ、誰
ガ思フタラカ
君ハ死ニヨツテ初メテ信仰上ノ
煩悶カラ解脱シタデアラウ。聞
クナラク、大島ノ病院ニ於ケル
君ノ臨終タルハ傍ヘノ喜代子夫

秋

窪田志朗

校庭の真白いラインが、私をすすん朗らかにする、秋！
秋、秋！ なんとといふ朗らかな響き、限りない沈黙の中にゐる。

口笛を吹く

湯淺照明

去年縫つて貰つた浴衣を着て去年の事を思出してゐる
昨道を歩き乍ら、流れてくる草笛の旋律と風の涼しさ、
無心になつてマンドリンを弾く、そつと忍び寄る美しい幻影
じつと山を見てゐると、なにがなし淋しくなつて口笛を吹く
すゝむしの聲愛しかな露ふかみ草の緑に佇みて聞く
あらし雨一しきり強くなりけり玉川宿に暫し憩へり (豪雨)
豪雨來て暫し憩へる家の兒は吾れになづみて嬉々と遊びぬ

人ナイタハリツ、讚美歌ヲ誦ミ
テ從容平冥目シタト云リ聖ヲカ
ナ殉教的ノ最期モ、今ハ悲シキ
涙語リテル
噫宮田青波君詩南社創社以來八
歳ソノ間君ハ夙クニ同人トシ
テ郷土文化ノ發達ニ意ヲ注グ君
ノ作品ハ雜誌「詩南社」ノ中軸ト
シテ汎ク後輩ヲ誘導スルトコロ
少ナカラズ、喜代子夫人マタ屢
々玉稿ヲ寄セテ玲瓏タル歌風ヲ
示シテキタガ、噫今ヤコノ二ッ
ノ柱石ハ永遠ニ去リテ亡シ。痛
恨何ゾ耐エム
サレド君ガ永年ノ献身努力ハ遂
ニ今日ノ詩南社トナリテ郷土文
化ヘノ寄與實ニ今後益々多キ
ヲ加フルデアラウ。我等マタ君
ノ遺志ヲ繼ギテ背クコトナキヲ
誓フ。君庶ハクハ安センセラレヨ
本日コ、ニ君ノ御靈ヲ祀ルニ方
リ溫容今尙彷彿トシテ永別ノ涙
更ニ盡キズ。詩南社同人社友一
同ニ代リ聊カ蕪辭ヲ述ベテ弔詞
トス
昭和七年九月廿七日
詩南社總代 片寄 耿二
尙、花環及香料代を寄せられた氏
名は次の通り、謹んで謝意を表す

短歌と郷土民謡の會

來る二十日午後一時から
平町マルトモホールにて

新妻久満夫氏當選披露

曩に福島民報社募集による福島縣代表の郷土民謡に磐城高等女學校教諭新妻久満夫氏が一等當選の榮を得た披露會を兼ね、併せて詩南社第五回秋季短歌會を來る十一月二十日(第三日曜)午後一時から平町四丁目マルトモホールに開くことになりました。何卒本縣同好の士は奮つて御來會あらんことを願ひます。

◆短歌會兼題は「祝」「山」各一首づゝ、十八日まで平町五丁目二八詩南車編輯所宛出詠して下さい
◆當日はビクターレコード會社吹込みによる新妻氏作本縣郷土民謡を御披露致します
◆會費はございません

主催 福島民報社平支局
詩 南 社

(14)

……私は？……
○子曰言易而難。
青年不可語自己。
○あのね、あの私は
○X引いてYを加へたもの
○透明の枯葉
○唯た強くなりた
英尾 甫 歌二 光夫

◎消 息

黒江 霞氏 七月下旬赤井村に歸省、九月上旬歸京。
佐藤政美氏 八月下旬來平。
小山田滋氏 九月、磐城新聞歌壇新設と共に還省となる。
美澤光夫氏 九月東京へ、十月上旬福島へ。
佐々木顯氏 十月同相馬双葉郡方面へ。夫々所用出張。
吉田 甫氏 十月上京。
田部彰大竹秋平氏等 十一月湯本町より雜誌「アラベスク」を創刊、(短歌)小山田滋、大竹秋平等(詩)田部彰其他
吉澤 健氏 十月、雜誌「PLAT ANUS」を創刊。(詩)野澤純、美枝、健、歌二等、其他登藤昌武窪田志剛氏 川崎小島氏の嫁約により澤美枝氏と婚約成り今月五日舉式する

金 風 集

綿工場の女工の顔の陰鬱な青白さが、何かなし氣にかゝる今日も機械のかけ、職工は天井を凝視めた、地球はごこも暑いんだ私は欲する、炎天！ その情熱とその意志とその實行をあかね空を流れる炭山の煙りにとほい子守歌を思ひ出す夕張板におつる木の葉、空はへうへうと冷たい青さだ指先に日のぬくみを感じ乍ら初秋の庭で張り物をするゆれてくるやうな山のざわめき夜霧の中でしどりとぬれながらさく松風にはのかな灯を守りながら幽霊の物語りする夜の山道引潮に引きのこされし荒磯の岩間の水に小魚浮くなりくれなるの色をのこして果てしなき大海原に日は沈みけり別れ來し君が瞳の澄みし色に似たりと思ひ空を見るかな黄昏の秋はさらでも寂しきに親しき友の今日を旅立つ外の面は風あるらしも窓見ゆる午飼の漁笛は亂れて聞こゆる久々に詣づる姉のみ墓べに草深々と亂れ茂れり大空に星一つあり亡き姉の瞳にも似てなつかしきかな人でなしと我をのしる母君の心思ひて泣くこともあり病癒えて嬉しき朝水仙の球を植うるに土いちぢりすり病や、輕くなりたる心地して怠たりし日記を半ば記せりくさぐさの思ひ出ぬちになりはひの土工で有りし頃がなつかし貧しくも迎へし友とくつろぎて寝られる家をほしと思へり

澤 美 枝
渡 邊 喜 美
磯 上 六 花
加 藤 さ だ 子
廣 本 光
梁 取 光 義

(15)

夢の濱邊

湯淺照明

秋落葉ばかりの
冷たい池の中で
暮れ方になる
忘れかけて居た蛙がカタカタ鳴いた
コロコロコロコロ……………
よるもひろもさびしく泣くか？ 蟬鳴よ
私は今日もS子への楽しい夢を送らう
ザクザクザクザク
それは美しい小石のある濱だつた
磯に小つちやなカニが遊んで居た
舟寄…………ふなよせ…………
二人して讀んで二人で微笑んだあの日
何時も想出すあの微笑み
あゝ濱邊にころ／＼ころんだ優しい微笑
秋の夜はさみしい
そつと忍び寄る幻影にさす濱邊の香り
私は今日もS子への楽しい夢を送らう
兵營の隅から

朝顔

窪田志朗

朝顔の起床ラッパが
沈黙の空に
朗らかに鳴り響く

×

兵隊が
一人、二人、三人
赤帽の兵士は
朝の教練をこなつた

×

眠つてゐる奴は唯だ！
ボン音して又一つ咲いた。
彼等の素晴らしい
朝への躍進！

路

雨あがりの
路は
湯上りの處女の肌のやう
新鮮な理智が
私をこりもどす
空と青葉と融け合つて
八月の午後！

月の狂想夢

小林しげる

サブラのヒロロ高いこすえに
教會のドームの尖端に
逆立ちした神經をいらたせん、
盗人のやうにあたりたの氣配をうかがひな
がら
表情のない畸形兒のやうな月が
ぶらんぶらんさがる時
どす黒い荒海のやうな街中の空氣に
妖婦のやうな猫の眼の感覺が
ぶつ／＼黄色い熾火をまやしてふくれる
のだ
さて廣い空間に起る風に怯えて
噴水のやうにあなをなと涙をながす
月の歎歎は
腐りかゝつた花びらのやうな
星くづを散布するのだ

朝

磯上六花

朝！
あ、なんさやばらかな言葉だ。

緑木のこすえで

澄み渡つた空にひつかかつてゐる

眞青な陽光が

さゝやいてゐる

柔かに

私の幸福を。

青

月が出るのを

待ちましょか

それとも待たずに

咲きませうか

どうせ二人は

名無草

宵に咲きましょ

咲かせましょ

樹のある風景

込堂翠山

大きな桐の木の下で

輝かしい平和の團欒

若い毎はふつ／＼とした乳房から

愛児の唇に情を送り

若い父はその傍に微笑んでゐる

おゝ…………なんんこの

美しき風景よ

その團欒の周圍を

微風は稲田の上からゆるやかに流れ

桐の葉は大きく人々を抱いて居る様だ

盛夏の太陽は

緑葉の梢にさんざんと光る

あゝこの樹のある風景

黄昏の町

三村哲朗

三日月は白く

高い教會屋根にかゝり

黄昏の風さわやかにそよぎ

ほのかなる工場のサイレンに

新らしい情熱を燃そう。

×

街路に立つた赤い雲灯が
さながら病瘦れた肺病患者の
様な呼吸にも似た
弱い燭光を散らしてゐる。

×

哀愁ある黄昏

日陰

加藤さた子

一日の難忙さ、喧騒の

シャズから遠ざかり

静閑の憩を見付けて

都會の街は寂しく暮れて行く

薄れすみ色の砂地

日のあたため私の心に

つねに日陰と同じ

日々日々のやるせなさ

秋のピクニック

- ◇来る十一月六日(日曜)
- ◇午前八時半、平野集合
- ◇川前、江田附近へ
- ◇會費は五十錢、但書食其他は各自持参のこと。川前下車、歸途は上小川より自動車。
- ◇申込順により二十五名限り
- (當日雨天十三日)

秋

美 澤 光 夫

にぶつた感覚の中に四ツの時鈴を聴く時
俺はぎす／＼痛む昨日のつかれた体に
汗ばんだ野良着をまとうのだ
握つた鎌はしつとりと落ちた水箱に冷めたい。
かくして俺は
黄金色に波打つ野原の一角をなぎ倒し行くのだ
秋は農村の決算期だ！
一ケ年の血のにじむ勢力のむくらるべき時なの
である。
だが俺の胸は朗らかなるべき秋に
悲壯なる憤怒と決意とに波打つてゐるのだ。
今年は豊作だと喜んでゐるこ
米の馬鹿安だ！
借金^{アデマ}の利息と年貢米を取つたら
幾等の糧が残るんだ！
去年は富作のガシ年だったのだ。

俺達は斯くして
地主と金貸に小作料減免と利息杭引の
大衆行動をまき起したのだ
この俺達に對し
警察のキレイな机の上で言ふのだ。
……君等のやつてゐる事は日本國民のする事で
はない。……
……君等がこの運動をやるなら吾々は斷壓をす
る……と
俺達は貧乏な百姓だ
だから米がなくなつても良いと云ふのか！
俺達百姓の生命をつなぐ爲の運動が
なぜ日本國民のすることでないのだ！
……そして君達はセンドウされてゐるのだ……と
俺は警察のお役人様を信用した
その結果はどうだ

差押と競賣と土地取上げ
そして俺は一人しかない子供を奉公に出したのだ
俺はこの現實の前に
……ガツチリした組織と強力な大衆行動に依つ
てのみ俺達の土地と自由は守られるのだ……と

哀悼の日記表

佐 藤 正 美

透明な初秋の朝私をゆり起した
一通の手紙はサイレンの様に鳴り響いた
宮田氏夫妻が波浮の港でなくなりました……と
二人の告別式の朝追憶の亂筆を唇に噛んで
私は部屋の中に冥福を祈つた
私の胸はびしょ／＼に噴霧器に濡れて居た
午後黒い服を着て佻しい草原を歩む
野いばらの道は金木犀の香に變つて居た

二人は今頃冷い墓標になつたらう
追憶が青い波の様に私の傍まで來ると
兩手を天に捧げて憂いに青ざめた
キリストの姿が眼に定着して消えない
黄昏が静かなオルガンとなつて響いて來ると
遙かにさしのぼす哀悼の手は
澤蟹の様にふやけてしまつた
空は冷たく曇る日が續く
私は喪章を付けよう

恐しき愉しみ

片 寄 歌 二

意志の逆行を擇る船がある。船に蒼褪めた陰影はないか？ 海は肌の粗い敷石である。瞳 數千敷 石は光つてゐる。血液の色素は斷涯を染める。瀧は背後に音響する。

繁華なる十字街の夜

街・夜

個の私より發生する數多なる影は亂闘する。

街の哀愁

夜の靜脈が靜まるにつれて街の月も蒼褪めてゐつた
浮遊する上層雲のファントム。
蜘蛛の巣のような空中線に慄える夜の神經。
街路は恐怖の尾を曳いて私に延ばされた夜の掌である。

補道に壞れた世紀の肢体が散らばつてゐる。

血のような落日。

石疊の上に落ちた私の影の上で蟬蟻が鳴く。

宮田青波君夫妻追悼錄



次 目

御靈に捧ぐ……………	渡邊 何 鳴
亡き人に呼びかける……………	小谷 美沙子
友人に生く……………	片 寄 歌 二
憶出のまゝに……………	佐藤 政 美
宮田君の事……………	美 崎 一 郎
喜代子さんの思出……………	白 木 英 尾
冥福を祈つて……………	高 久 晚 霞

御靈に捧ぐ

おのづから絶ちしいのちぞ島の秋

何 鳴

亡き人に呼びかける

小谷美沙子

兄さん！姉さん！　どうしてあなた達は逝つてしまつたの。たとへ、姉さんが死ぬと言つても兄さんは、きつと止めてくれると思つてゐたの。あゝ……それなのに、それなのに、あなた達は逝つてしまつたのね。

母が死んだ時。私達を可哀相だと云つて泣いてくれた兄さん。

あなたはほんとうに私達に優しくかつた。

それから何でもよく話し合ひ、慰め合つた姉さんあなたとは幼い頃から、随分喧嘩もしたり、意地の悪いこともしました。

でも、みんな返らぬ遠い思ひ出となつてしまつた

した。私と宮田青波兄との交友は古いとは云ひない、而し、私は彼を幾分でも知りぬいてゐる。けれど、私は彼のしんそこを世の誰人にも語りたくはない。

宮田兄と知り合ひになつたのは、秋の夜、白い風が吹いた日の夜だつた。佐藤清子さんの紹介で初めて知つた。その夜受けた印象は、非常に淋しい人だと思つた。何處かに寂寥に似つたものが深く根強く貌に刻みつけられてゐるやうに思はれた。こうした印象が、親しさを増す度に私の心の底深く、不思議にもこびりついてゐた。

宮田兄は社交に長け、人好きのする温厚な性質の人であつた。人によく、親によく、子供によく友によく、誰れにもみんなよかつた。一寸した事にも涙ぐみ易く、それでゐる時によると仲々快活で向日葵のやうに明るい様子を見せる。或る時、私は、その歌のものさびしく、やるせない風情との矛盾を「宮田兄は心をあくまで澄ませて本心を描くのであらう」と書いた。そして一面に於へて兄の風格をよろこびながら、お對ひに明るい交情

—(22)—

幾度寫眞に向つて呼びかけても、あなた達は返事をしないのね。なぜ黙つてばかりゐるの？　あゝ……あなた達はほんとうに、逝つてしまつたのね。こんなに、泣いて呼んでゐる私にあなた達はさよならもしないで、逝つてしまつたのね。でも、それがあなた達の幸福だと云ふのなら、私は悲しいあきらめ切れない心で、最後のさよならをします。も早、幽明の境を異にしてしまつた私とあなた達、考へれば考へるほど涙が出てならない。泣くこと、祈ることよりはか何が自分に出来得よう。兄さんよ！姉さんよ！　たゞ安らかに眠つて下さい。あゝ……どこしへに、どこしへに。

友人に生く

片 寄 歌 二

陽の光りのさえて美はしい初秋、相芙蓉の葩が静かなうすむらさきの氣流にこけあひ、いとなつかしいもの、魂を呼ぶ、にははしいあした、友は求めつゝ、とほとほものを胸深く秘めて、慌しく逝去

をたのしんだ。兄は非常に厚い同情家でもあつた。この同情を受けた人は何人あるだらう、私もその一人である。今になつて泌みくく白い風を想ふ。宮田兄は白い、風を愛した、それに吹きまわられて時折、何とも見別のつかないで残つてゐる天空のをくの雲のやうなひとつの家を欲した、時は流れ、雲は日毎おのれの翼をあらたにする、兄はその中の小鳥の胴体を望まずして實にその翔にかゝるきれいな手指の鴻毛をいつくしんだのだ。

「さみしい」と、兄は飽くなき迄これを連語した事があつた。

兄は歌を書いた。書けるだけ己れのものに取入れて書きにかいた。柔らかい、握れば潰れそうなそよ風にでもばちんとはじける晩夏の鳳仙花のやうな歌をつとめて何處へでも書いた。そして兄の未成品は澤山あると思ふ。

また、兄は詩も書いた、俳句も書いた、そして戀もかいた、喜代子夫人との戀を一冊の詩帳として幽明の境をこにした。死が慌しく、あまりにも明るく宮田兄の姿が私のこゝろに残つてゐる。

—(23)—

憶出のまゝに

佐藤 政美

宮田兄はまだ生きてゐるのではないか。
 さはれ、私は一人の友を喪なつた。
 兄の夭折は惜しい、誠に逝いて再びかへらざる友の骸の哀れに冷たき、兄の想花ははるか時代の岸にさゝやかな實に結ぶにちがいない、ああ、そして咲いてあれ、しろく運命つたなき世の靈はいくへにも流れる、きよく原始のまゝなる像につくらねながら。

生きてゐるのだ、たしかにそうだ、兄も美はしいこゝろをなつたひとつのを又ありのまゝに還してゐた、それでいゝ、兄に人生はある、兄はしられざる魂を自分で生きてゐる。

私は兄を言ふまい、兄の人のよさを識つてゐる私だけでいゝ。再び、兄にあたへる……………

……人よ永遠に人たれ……………
 想ひば兄と初めて知つて、共に詩南車を赤裸々になつて抱擁した頃が偲ばれる、あゝ、ものきらびやかなありし日よ、ふたゝび來ぬか。

兄の追悼を世に贈るに際し親しき友の涙に埋もれた生々しい卒塔婆に貧しいこの追悼文を捧げる

宮田兄 兄が詩の島波浮の港で死去された事は四日朝詩南社からの葉書で知りました。先月十八日お尋ねした時が永久のお別れになるとは思ひませんでした。あの時それ程人生の悩みが有りながら色々詩南社の事はかり心配を下さいましたね。

宮田兄 兄に昨年私が浪江に轉任の際お宅で歌の話をした時に何月號かの「心の花」に三原山の火口（作者は忘れた）を詠んだ歌を非常に感激して私に讀んで聞かせてくれた事がありましたね。今思へばあの歌が兄の最後の地を定める動機となつたのではないでせうか？

宮田兄 兄等は家庭的な悩みがあつた事は私にも話して呉れて 度は八幡小路方部へ轉居する等と云はれましたね。風様喜代ちゃんも淋しい人格

の所有者でした。あの二十六輯に兄等が結婚記念のチャーチペルを造りながら

吾が命神に委ねて安らげき生活の暇に歸せれる鐘

と歌ひつゝ現實の悩みも神の示現のまゝに生き様とひたぶるに信じて居た兄がやがて宗教への懷疑を抱いて死の一途を求め様とは誰が想像出來得たでせう。

宮田兄 兄がかつてクリスチャンがなかつたなら決して自殺はされない筈です、現實の悩み、宗教の懷疑は内面生活の崩壊となつて「神」の觀念を否定しようとした兄に待つて居たものは冷然たる死以外に何物も無かつたのでせうか。それともキリスト教的未來觀から天國に安息所を求めたのでせうか？

あゝ兄等よ冥福あれ！

宮田君のこゝごども

美崎 一郎

宮田青波君が死んだ。惶しくも旅の空で、愛妻

と共に死んで行つた。近眼鏡の奥に湛へられた頬笑が思ひ出される。思へば思へば、其の死が惜しまれてならない。

君達夫妻と相知つたのは、つひ昨年のこと、それから僅か一ヶ月の時日を経たに過ぎない。然し何處か共鳴する点があつてか、わざわざ二度迄も訪ねて呉れた。家族の者達迄すつかり親しみが出て來て、君達の死を聞いた日等一日、種々と語り暮した程だつた。

最後に會つたのが去る初夏の一日、詩南社の人々と一緒に揃つて來られた時だつた。靜かに晴れ上つた海邊を歩いた。はまなすの花が赤かつた。夫人喜代子さんは其の時、疵の手術をしたといつて、左手をすつかり繃帯してゐた。それから大分立つから、もう良くなつたに違ひないが、自分には今でもやはり繃帯してゐるやうに思はれてならない。僕に對して、宮田君は可成り筆不精だつた。或は誰に對してもそうだつたか知れない。來訪の時不意にやつて來た。そして歸つてからも何も言つて來ない。會へば心置きなく微笑を以て話す君

にかうしたむき出しな性格の一面があつた。自己を飾らうとする氣の微塵もなかつた爲だらう。この点却つて好感が持てた。今はかうしたことも思ひ出の種となつた。

喜代子さんの思出

白木英尾

青波氏の事は片寄君が書いたので私は喜代子さんの事を書きたいと思ふ。けれ共これは私なごより生前喜代子さんと親しかつた人が書いて呉れる方がよいのだ。喜代子さんの靈のためにも、私などが書くことは何だか本當でないやうな氣がするから……………。

奥さんと最後にお目にかゝつたのが八月二十五日の音楽會の晩でした。

あの時は、誰もそうでしたらうが私などもその忙がしさに全く他を顧みる暇がなく殆んど混亂の狀態でした。舞踊に伴唱する兒童をその場になつて遽かに頼んできた惶しさ、プログラムの時間を氣にしながら自動車を下りて、マルトモの食堂の方の二階をトントン上つて行つた時だ、靜かに上

から下りて來た女の方があつて、私を見てニツコリ會釋なされたのだが、瞬間私はハッ?と思つた。この方は、ごこの奥さんだらうと思つた。それが宮田さんの奥さんと氣付いたのは五六歩行き過ぎてからで、私は言葉も掛けずに失禮してしまつた事が大變濟まない事しをたやうでいつまでも心に殘つて悔まれた。あとでお伺ひした時お詫びしようと思つて居たのが、今ではもう永久に私の胸に残された儘となつてしまつたのです。

今でもはつきり思ひ出せるのは、奥さんがニツコリ微笑された時の、あの頬の笑窪です。笑窪を作つて微笑される奥さんを見ると、何となく心が和やかになつてきたものでした。

更生の二十六輯を出す時、色々の用件で宮田さんの所へ打合せに行つたが、その時は奥さんも傍に居て私共の話を聞いて居られた。私がうつかり冗談や輕口をすべらせると、奥さんはニツコリと微笑なされる。その時の頬の笑窪が今でも目に映るやうです。ほんとうに奥さんは笑窪の可愛い方でした。然しそれもこれも今は悲しい思ひ出、美

しい奥さんの笑顔はもう再び還らないのです。

雑誌編輯の際など、宮田さんが都合悪くて來られないと、奥さんが原稿類を入れた包みを持つて片寄君の所やマルトモの二階へ、はア／＼息を切らし乍ら急いでやつて來たものでした。私が奥さんと初対面したのも確かそんな時だつたらうと思ふ。あまり飾りつけないで非常に感じのよい人だと、毎もそう思ひました。どちらかと言へば、怜悯……といった感じのする方でした。「こんどは奥さんも歌を出しなさいよ」など、言はれると、ニツコリ笑つて「わたし駄目ですわ」と温なしく斷はられたものでした。いつか二十六輯の時だつたか、印刷の間に合せる爲め私が宮田さんの所へ行つて原稿をせついた時に、宮田さんが「出來なくて困つたよ」と言ひ乍ら「ぢや二人合作でい、かい」と、ちらりと傍の奥さんを見たら、奥さんは本氣になつて「駄目々々、わたし書かないからい、」と極力反對したんでしたが、之れは微笑ましいシーンでした。こんな事まで今は悲しく思ひ出されます。

奥さんの歌は前期詩南車を出してみると載つてゐますが宮田さんと家庭を持つてからは殆んど作らなかつた様でした。

わが友はたくみなる文に紅葉をへて深山の秋を知らせて來たり (二十二輯所載)

照り足らふ光の中に飯食めごししみじみ寒し土に在れば (同)

待てご來ぬ君の便りを待ちわびつ今宵も熱の高まるおぼゆ (二十三輯所載)

春の野に摘み來し花のあまりにもさびしき花ぞ君を待ちつゝ (三月好間短歌會)

これらは本當にいゝ歌だと思ひます。ずつと續けて居たらもつとよくなつたでせうに、殊に奥さんが死を決心なすつてから、せめて歌でも残してゐて呉れたら、それこそ透徹した作に接し得たらうと思ひます。

奥さんは未だ若かつた、二十四位で死の旅へ急いだ心胸を思ひやる時、生くるに耐え得なかつた心の弱さが本當に可哀相なものに思はれます。宮田さんも奥さんのことは愛してゐたし、奥さんも

高久晩霞

私が宮田君と初めて逢つたのは、確か大正三十四年頃川崎小島氏のお住居で警城の文藝家が大勢集つた事がありました、その時、片寄君などと一緒に來て居られたのが最初だつたと憶ひます。喜代子さんの結婚披露會にも行きました。極く眞面目な、素直な方で、人の説を受け入れる人でした。歌は、どちらかと言へば竹柏園派に近い方で、「心の花」へもよく載つたのを見受けました。いつも穏やかな作で、今まですつと見て來てましたが今度の「三原山」の歌は可なりよく出來てゐる。

と思ひます。やはり死の前に事實を歌つたせいか
眞に迫つております。

片寄者から亡くなつたのを聞いた時は、ほんとに意外の感に打たれて呆然としました。まだ氣持の若い、これからの人でしたのに、自ら死を選んだのは惜しいことをしたと思ひます。悩みのあるらしい様子など普段一つも見えなかつたし、音楽會の晩もあゝして一緒になつてやつたので、私も、まだあの様子が目に見える様です。追悼歌を作りましたが、それよりも思つてこれを書きまゝした。終りにあの人達の冥福を祈りませう。

宮田青渡氏 名は誠吉、明治三十四年十一月七日平町一丁目に宮田佐久馬氏の大男と生る。明治四十二年第一小學校入學、大正二年九月静岡縣濱松小學校に轉校、同三年卒業、同五年平町鍛冶町廿六に歸る。昭和四年三月私立平工業學院卒、行年三十二。

宮田喜代子氏 明治四十二年八月二十五日平町南町五十一に小谷勇太郎氏次女と生る。大正二年第三小學校卒、昭和四年十二月宮田氏と結婚、南ま子、鈴木千代のベシネームあり。行年二十四。

編輯後記

一、詩南社は詩歌を中心として郷土の藝術を受するもの、集りである。
 一、詩南社は客員、同人、社友から成り社友を分ちて特別社友普通社友とす。
 一、詩南社は隔月雑誌『詩南』を発行社友に頒ち隨時種々の集會を開く。
 一、雑誌『詩南』一の編輯は同人中の適宜の編輯同人が専ら之をなす。
 一、客員、同人、及び社友の作品は雑誌『詩南』に掲載する。而てその選擇整理は編輯同人たる者の責任とする。
 一、客員は詩南社を接觸し郷土文化の發達を期するものとする。
 一、同人は雑誌『詩南』へ恒に秀逸なる作品を載せて、且つ詩南社一切の義務を負ふものとす。
 一、社費は年額とする。（但、前納及び分納の何れによるも差支へない）

同人費	金貳圓
特別社友	金貳圓
普通社友	金壹圓

一、客員或は同人三名以上の推薦ある者を同人とすることを得。
 一、社友五名以上ある町村に支社を置く

昭和七年十月

△今輯は故宮田浦波氏夫妻の追悼を主として、「我々」は黄泉に新たなるものである。「三原山」の歌稿は同篇が大島より高久晚霞氏に宛てた最後のものである。△初め、原稿が思ふ様に集まらないのでなかなか焦慮した。その爲め發行が一ヶ月も遅れたのは全く已むを得なかつた。然し新妻久満夫氏が久しぶりで力力を寄せて下さつたのはありがたに△從來非常に御熱心まで短歌の選稿に當つて下さつてゐた高久氏が、著るしく出づるの煩へることに忙がしいお仕事の余暇では仲々容易でないのに、今後は専ら同人持廻りて選稿することになつた。お互に勉強して行きたい。△詩南社乃至至聖土文藝結社に對する認識缺如から一時種々なる高見卑説が猖獗したやうであつたが、之は我々また輕に甚だ迷惑千萬なことであつた。兎角視野の狭い偏見に捉はれ獨善自慰の感情的言辭が大體よくに述べ立てたものが多く、勿論一般の知識人はそのものゝと認識し10を10のものゝと評價する品格と素養を以て之の立言に對したであつた。我々は信する。今我々はついでに第廿九輯に取掛る。今

- ▼投稿は詩及び短歌に限る。必ず原稿用紙へ楷書で、はつと書くこと。
- ▼社友以外では投稿は自由。住所姓名は明記されたい。誌上の匿名は可とす。
- ▼投稿の取捨は編輯者一任のこと。
- ▼運着の投稿は郵封に載さない。尙、原稿返戻には一切慰がない。
- ▼送稿には必ず封封、三十宛まで二銭。
- ▼「詩南社原稿」表記すること。
- ▼宛名はすべて必ず左記宛にされた、福島縣平町五丁目二八

詩南車編輯所

◆次輯原稿締切 十二月五日

昭和七年十一月五日印刷
昭和七年十一月五日發行

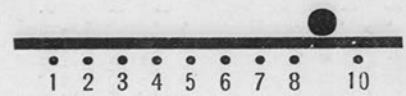
福島縣平町五丁目二八

編輯兼發行人 片 寄 耿 二

刷所平活版所

發行所詩南社

願價拾五錢（送料貳錢）



K • K A M A Y A

石城銀行組合

診療科目

内科、小兒科、婦人科
外科、耳鼻咽喉科
皮膚病、花柳病科
レントゲン科

院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤羽 清
藥局長 藥劑師 佐竹 菊雄
宅診午前・往診午後

平町田町六十四番地
高久病院

電話五二三番
三猿文庫